第三章　校友会活動

校友会機関誌『校友会雑誌』、『東京美術学校校友会月報』により、明治三十二年より大正八年までの主な活動事項を記す。

明治三十二年

一・八　校友会倶楽部で総会開催。規則改正、久保田鼎校長心得の会長就任式、黒川真頼の美術に関する講話等が行われる。規則改正の要点は、卒業生を本会員から除外して特別会員としたこと、鑑定や依嘱製作、出版等営利がからむ事業を廃止したこと、毎年一月開催の大会（総会と展覧会）を改め、総会は一月、展覧会は四月開催としたこと等である。なお、議事終了後、「一同茶菓を喫し快談の後ち散会せり」（『校友会雑誌』第一号）とあり、岡倉校長（会長）時代にはこうした折りには恒例となっていた大杯の回し飲みも廃止された様子である。

〇・〇　委員（任期一年）改選。職員部委員は川端玉章・長沼守敬・海野子之吉・金井清吉・白井保次郎・島田友春・杉浦瀧次郎・向井繁太郎・林美雲・藤島武二・小坂力松・本多佑輔・長原孝太郎・大村西崖・野田義守・高田松男。生徒部委員は笹島秀弥・足立啓・前波覚次郎・三浦自也・松里政登・結城貞松・窪田喜作・石田常福・大八木一郎・佐藤健四郎・青木外吉・石井徳千代・海野銀三郎・曽根鋭・津田信夫・小岩峻。職員部常務委員は大村西崖・島田友春・高田松男。生徒部常務委員は大八木一郎・前波覚次郎・松里政登。

九・二七　生徒部補欠委員選挙。山下甚太郎・高村光太郎・堀川鼎・黒川広吉当選。

九・二八　委員会開催。常務委員松里政登に代り津田信夫補欠当選。修学旅行につき協議。

一〇・二　委員会開催。修学旅行について協議。天草友雄・田中後治・前波覚次郎・青木外吉ら先発委員となる。

一〇・九　修学旅行。箱根一泊。川端玉章・長沼守敬・高村光雲・石川光明・天草友雄・羽田禎之進・田中後治・本多佑輔・沼田勇次郎・向井繁太郎・平田惣之助・溝口禎二郎・斎藤一男ほか百六十余名参加。羽田が指揮をとる。

一〇・一九　神田多賀羅亭で修学旅行尽力者慰労会。

一一・一　委員会開催。天長節遥賀式について協議。

一一・三　校友会倶楽部で天長節遥賀式挙行。大村西崖指揮をとる。

一一・二〇　委員会開催。柔道部を校友会遊戯会の一つとする。

一一・二五　校友会倶楽部で柔道部大会開催（『校友会雑誌』第二号記事参照）。師範足立厚実。

一一・二九　『校友会雑誌』創刊。

明治三十三年

一・八　大会開催。本年展覧会見合せの件、委員の会費免除、職員部委員を五名に削減等決定。委員改選。井上良介・志和舜了・足立啓・山辺知臣・三浦自也・平子尚・吉田六郎・佐藤健四郎・石川成録・青木外吉・細谷三郎・滑川兼彦・曽根鋭・新免教太郎・小岩峻・高田松男・島田友春・大村西崖・野田義守・羽田禎之進ら当選。

一・九　委員会開催。生徒部常務委員に山辺知臣・青木外吉・三浦自也を選出。雑誌編輯員に平子尚と大村西崖（五月十二日辞退）を選出。

二・一四　三浦自也に代り中田清委員となり、常務委員に新免教太郎を選出。

二月　講話会開催。

三・一三　委員会開催。講話会を毎月第二土曜日に開くことを決定。

三・二五　予算会議開催。運動会を春、秋各一回開催と決定。

三・二六　委員会開催。運動会につき協議。

四・五　春季運動会の先発として沼田勇次郎・細谷三郎・山辺知臣・屋代鈇三ら伊香保、榛名へ出発（『校友会雑誌』第三号に屋代の紀行文あり）。

四・七より三日間、春季運動会開催。百二十七名参加。

四・二〇　神田多賀羅亭で運動会委員の慰労会開催。

五・一二　大村西崖委員を辞任。

六・二　柔道部大会開催。本田幸之助（種竹）の遊清見聞談講演あり。

八月　『読売新聞』（八・一六）に校友会が著名美術家の墳墓および事跡の調査を平子尚（鐸嶺）に嘱托し、掃苔会と気脈を通じてその大成を計ることにしたという記事が掲載されている。『校友会雑誌』第三、四号所載鐸嶺著「東京芸術家墓碣所在地一覧」は調査報告と思われる。

一〇・一八より三日間、秋季運動会として伊豆修善寺へ遠足。

本年中、金井清吉死去（三・三〇）につき生花一対贈呈。比留間一郎死去（一・一）、斎藤新助死去（三・五）につき香奠各五円贈呈。

明治三十四年

一・八　大会開催。教職員部委員を八名に改める。

一・一六　委員改選。職員部委員は野田義守・河辺正夫・近藤延太郎・白井保次郎・羽田禎之進・高村光雲・屋代鈇三・藤島武二。生徒部委員は有友助次・松岡輝夫・中島重丸・足立啓・有馬龍秀・森田洪・石川確治・本保義太郎・平子尚・谷斉一・水谷鉄也・滑川兼彦・柚木房吉・松原友丸・岩瀬多磨。

四・一九〔一の誤か〕　委員会開催。職員部常務委員に野田義守・白井保次郎・屋代鈇三を、生徒部常務委員に平子尚・本保義太郎・水谷鉄也を選出。体育部中に撃剣部、庭球部を、文学部中に歌の会、考古会を置くこと、平子尚を雑誌編輯員とすること、校友会より月島丸遭難者遺族へ義捐金を贈ること等を決定。

二・一六　講話会開催。瀧精一「文武についての所感をのぶ」（『校友会雑誌』第五号に筆記掲載）、海野美盛「仏国大博覧会見聞談」（同）、本田種竹（二・一八『読売新聞』に演題は「清国漫遊談」とある）。

三・九　講話会開催。島村瀧太郎（抱月）「写真趣味と日本の文芸」（『校友会雑誌』第五号に筆記掲載）、井上哲次郎（演題未詳）。

四・六　委員会開催。運動会につき協議。

五・四　講話会開催。上田敏（演題未詳）、大塚保治「裸体と美術」（『帝国文学』第七巻第十一号附録、『日本美術』第三十六、三十七号に

久保田鼎，正木直彦送迎会記念

筆記掲載)。

(八月十八日に同窓会(在京卒業生有志か。)主催の久保田鼎・正木直彦送迎会が校内で開催され、正木が欧米視察談および教育方針に関する所信の演説を行い、一同写真撮影をしたという記事が同月二十日付『読売新聞』に載っている)。

本年中、山田鬼斎死去(二・二〇)、杉浦瀧次郎死去(五・三)につき香奠各五円贈呈。

九・三〇　久保田鼎に代わり、正木直彦が校友会会長となる。

一〇・一〇より四日間、会員百余名山梨県猿橋地方へ修学旅行。

一〇・一二　大会開催。久保田鼎を名誉会員に推薦。

一〇・二二　委員改選。職員部当選者は野田義守・桜岡三四郎・羽田禎之進・海野子之吉・下村晴三郎・黒岩倉吉・屋代鈇三・辻村延太郎。生徒部当選者は田中新一・有安助二・渡辺忠三郎・永倉茂・足立啓・山下新太郎・吉田六郎・大八木一郎・森田洪・宮原常二郎・水谷鉄也・野村陸雄・伊藤龍吉・岩瀧多磨。

一〇・二六　常務委員互選。職員部当選者は羽田禎之進・野田義守・海野子之吉。生徒部当選者は水谷鉄也・足立啓・岩瀧多磨。

一二・二二　講話会開催。工学博士高松豊吉「色素及其応用」。

本年中卒業生蒔田実死去につき弔詞を贈る。

明治三十五年

二・二五　体育部中に弓術部を新設。

二・六　柔道部、撃剣部の寒稽古皆勤者八人に賞牌を贈る。柔道部は沢田誠一郎・薄拙太郎・森田静也・勝尾準太郎。撃剣部は松石渉・小林源吾・後藤茂啓・渡辺拾。

三・一九　委員会開催。会長の指名により久米桂一郎・岩村透・海野子之吉・黒岩倉吉・永倉茂・吉田六郎・屋代鈇三に本会雑誌編輯員を、屋代鈇三に編輯掛を依嘱。

四・七より四日間、本会員百有余名千葉県北條より鴨川・勝浦へ修学旅行。

六・一一　山名貫義卒去につき生花一対を贈呈し、葬儀場にて総代白浜徴が弔詞を朗読。

六・一三　昨年の講話会講演者井上哲次郎・大塚保治・上田敏に鋳金花瓶贈呈。

六・二一　『東京美術学校校友会月報』創刊。

六・二三　校友会倶楽部で科外講義開催。大塚保治「京都画家対東京画家」(同月の『読売新聞』『中央新聞』等に筆記が連載された)。

一〇・三一　委員改選。職員部委員は○野田義守・白浜徴・屋代

鈇三・○羽田禎之進・島田佳矣・津田信夫・黒岩倉吉・○千頭庸哉。生徒部委員は後藤経一・後藤茂啓・有安助二・○渡辺忠三郎・永倉茂・大槻弐雄・○谷斉一・小林鐘吉・竹内定吉・遠藤忠雄・○沢田誠一郎・玉川健太郎・小林正次郎・堀井政吉。（○印常務委員）

一一・一八　月報編集委員および主任改嘱。編輯委員は久米桂一郎・岩村透・岡田秀・黒岩倉吉・永倉茂・西村喜三郎・石島文太郎・谷斉一。編輯主任は屋代鈇三。

一一・二九　校友会主催第一回陸上運動会開催。徒競争その他各種競争のほか、日本画二年生の時代行列、各科意匠に成る窓掛、パノラマ館等々の余興があった。

十一月　『作品集一』を画報社より発行。

本年中天草友雄実母死去、吉田清次郎死去（三・二七）につき弔詞と香奠各五円を贈る。寺崎広業の実父（六・二七）死去、藤田文蔵の養母死去（九・二三）、岡田三郎助の実父死去（九・二三）につき生花各一対贈呈。卒業生小檜山右近（七・一七）死去につき弔詞を贈る。町田五一死去（一〇・一四）、大川準三死去、岡田三郎助実母死去（一〇・二四）につき香奠各五円贈呈。

明治三十六年

三・三〇　弓術部幹事長海野美盛渡仏につき後任を高村光雲に嘱託。

四・七　弓術部道場を改造拡大。

四・一〇　弓術師範本多利実へ海野美盛作の同氏像を贈呈。

一〇・五　委員改選。職員部委員は○羽田禎之進・○野田義守・○岡田秀・屋代鈇三・黒岩倉吉・津田信夫・岩村透・千頭庸哉。生徒部委員は○沢田誠一郎・○有安助二・○竹内友吉・岡雅雄・伊藤貞夫・後藤茂啓・松岡輝夫・坪田虎太郎・亀山克己・平井武男・勝尾準太郎・木村第一郎・永島三郎・常木新蔵。（○印常務委員）月報編輯委員は久米桂一郎・岩村透・岡田秀・黒岩倉吉・屋代鈇三・西村喜三郎・石島文太郎・谷斉一。

一〇・二〇　委員会開催。規則の一部を改正し、雑誌発行の範囲を拡張し、生徒の会費一年一円八十銭を二円に改める。

一一・三　本校設置紀念美術祭挙行。

一一・七　河口慧海による「西蔵国と美術」の講話会開催。

一一・一九　委員会開催。音楽部新設を議決（和田英作に一任）。

本年中関豊英死去、中村達死去、光井湛常死去につき香奠各五円と弔詞を贈呈。

明治三十七年

三・七　羽田禎之進応召につき屋代鈇三・玉田文作を常務委員代理とする。

三月　『西蔵品図録』を発行。

四・一五より三日間、校友会倶楽部で日本画科主催恤兵展覧会開催。

五・一二より三日間、会員一同鎌倉、江ノ島へ修学旅行。

一〇・三　委員改選。職員部委員は○高田松男・○島田佳矣・○

玉田文作・屋代鈂三・岡田秀・黒岩倉吉・津田信夫・辻村延太郎・和田英作・海野美盛。生徒部委員は○牧野左武・○竹内定吉・○木村第一郎・高木左直・室野琢磨・武藤直信・伊藤貞夫・水上泰生・有田四郎・太田喜二郎・薄拙太郎・野田昇平・森田亀之助・森垣栄・勝尾準太郎・永島三郎・岡本尚市。（○印常務委員）

月報編輯委員は久米桂一郎・岩村透・岡田秀・黒岩倉吉・屋代鈂三（主任）・西村喜三郎・石島文太郎。

一〇・一四　職員部委員を八名より十名に改正。

一〇・二五　会員出征者鈴木武之助・浅野勇次郎・飯田仁三郎へ傷病見舞状発送。

一一・四より三日間、会員百九十余名箱根地方へ遠足旅行。

本年中、高辻武死去（一・一六）、松園石水死去（九・七）、野田義守死去（九・七）につき香奠各五円贈呈。桑原陶死去（三・二六）、佐伯徳介死去（四・五）、山本筍一死去（四・一七）、羽生道也戦死（八・三〇於遼陽）につき弔詞を贈呈。

本年、『作品集二』を発行。

明治三十八年

三・九　出征会員十九名へ会長より慰問状を贈る。

三・一一　講話会開催。大村西崖が欧州漫遊所見について講演。

三・二二　奉天の会戦で負傷した会員頼富新吉・玉井正申・浅野勇次郎・有元轍三郎・大智恒一へ見舞状を贈る。

四・一より七日間、本会主催恤兵展覧会開催。純益金を陸軍省へ寄贈する。

一〇月　委員改選。職員部委員は高田松男・屋代鈂三・○島田佳矣・黒岩倉吉・津田信夫・和田英作・岡田秀・海野美盛・○玉田文作・岩村透。生徒部委員は吉田清二・室野琢磨・武藤直信・三橋信吉・○水上泰生・田辺至・渡辺乙彦・太田喜二郎・○平井武男・大槻弐雄・小野六郎・和田嘉平次・小倉右一郎・仙石貫造・岡雅雄・君島金三郎・○木村第一郎・山本貞治・井上大次郎・原田謹次郎。（○印常務委員）

十月中旬　岩村透ら二十数名が音楽部を組織。

一〇・三〇より四日間、会員の遠足運動会として伊香保、榛名、妙義地方へ旅行。

この年、後藤矩一戦死（三月初、於奉天）、木村良吉戦死（三・九、同）、堀内喜一死去（九・二三）につき弔詞を贈呈。芳賀晋三死去（六・二五）につき弔詞と香奠五円を、林謙死去（一一・二九）につき弔詞と香奠三円を贈呈。

明治三十九年

四・二三　サンフランシスコ在住会員江良剛治・金沢悌次郎へ震災見舞状を発送。

六・二　第二講義室で音楽部第一回演習会開催。

一二・一三　写真部設置。

本年の委員改選については記録なし。

本年中、江沢茂信死去につき香奠三円贈呈。氏家静修戦死認定（三十八年三月、於奉天）、桃沢重治死去（八・二九）、前田耕治死去

（九・二七）、浜中鉄也死去（一一・五）につき弔詞贈呈。伊藤雄次郎死去（九・五）につき弔詞と香奠七円贈呈。大久保健児死去につき香典五円贈呈。

本年中、『美術祭記念帖』、本校校舎および各教室絵葉書、『日本名画百撰』を発行。

明治四十年

三月　文学部設置（部長大村西崖）。

四・二〇　文学部発会式、講話会開催。夏目漱石「文芸の哲学的基礎」、上田敏（演題未詳）。詳しくは388頁参照。

一〇・五　運動部にピンポン部を設置。

十月　委員改選。職員部委員は○高田松男・○羽田禎之進・○島田佳矣・屋代欽三・海野美盛・津田信夫・石井吉次郎・長原孝太郎・黒岩倉吉・白浜徵。生徒部委員は○香川敬事・○鹿毛屋蔵・○広瀬尋常・福島外喜雄・田村寛二郎・吉田清二・萬鉄五郎・山口亮一・田辺至・入谷昇・小野六郎・朝蔭円次郎・高橋昇太郎・飯田徳三郎・神谷甚一郎・山下貞治・高中文助・長谷川源太郎・小菅敬左右。

本年中、向井繁太郎死去（五・八）につき香奠五円贈呈。正木直彦の兄死去、佐野長吉死去（一〇・一〇）、本保義太郎死去（一〇・一八、於パリ）につき弔詞を贈呈。

この年、『作品集三』を画報社より発行。

明治四十一年

三月　『作品集四』を画報社より発行。

四・二三　生徒大谷浩へ月報編輯員嘱託。

五・一二　月報編輯員中溝四郎辞任につき岡本一平に後任を嘱託。

六・六　文学部主催講話会開催。島村抱月「文芸進歩の方向」、佐々醒雪「楽屋落ちの文芸」を講演。

六月　『作品集第五』を画報社より発行。

一〇・七　委員改選。職員部委員は島田佳矣・高田松男・屋代欽三・羽田禎之進・石井吉次郎・海野美盛・津田信夫・長原孝太郎・白浜徵・黒岩倉吉。生徒部委員は和田順顕・小川正雄・飯田徳三郎・今尾十一郎・福島外喜雄・土橋三郎・吉田清二・前山長次郎・萬鉄五郎・山口亮一・岡本一平・安部然・入谷昇・津村央喜・岩崎文七・太田静一・三木栄・吉野富雄・我妻栄吉。

一〇・一二　委員会開催。互選により常務委員に島田佳矣・高田松男・羽田禎之進・吉田清二・岡本一平・飯田徳三郎を選出。

十月　文学部主催講話会開催。戸川秋骨、大町桂月が講演（演題未詳）。

十一月　同講話会開催。前田慧雲「奈良平安朝時代の仏教と美術との関係」（『東京美術学校校友会月報』第八巻第二号に筆記掲載）、鈴木鼓村（演題未詳）の講演が行われる。

この年、同講話会に前田黙鳳が招かれ、「漢字の起源及変遷」（上記月報に筆記掲載あり）を講演。

本年中、後藤茂啓死去（四十年十月三十日）、橋本雅邦死去（一・一

三)、竹内定吉死去(五・二三)、中島重丸死去(五・一一)、田中重次郎死去(五・一一)、君島金三郎死去(五・一〇)、遠井藤太郎死去(六・二四)につき弔詞贈呈。宇都宮宰造死去(十月)、小柴濬四郎死去(十月)につき弔詞と香奠各五円を贈呈。

明治四十二年

一・二三　月報の「卒業生動静」欄を詳密にするため、従来嘱託の岡田秀・黒岩倉吉の外に中村勝治郎・小場恒吉・八巻於菟三・香取秀治郎・堀井政吉に月報編輯員を嘱託。

四月　文学部主催講話会開催。前田黙鳳(演題未詳)、岩野泡鳴「ペン、ペンシル及び毒薬」(『東京美術学校校友会月報』第八巻第十号に筆記掲載)の講演が行われる。

九・三〇　委員改選。職員部委員は高田松男・石井吉次郎・海野美盛・屋代鈕三・白浜徵・島田佳矣・津田信夫・羽田禎之進・黒岩倉吉・和田英作・結城貞松・菅野真。生徒部委員は清島長次・青山扶・今尾十一郎・土橋三郎・富田一昭・野木定次郎・前山長次郎・三国久・山口亮一・岡本一平・田辺孝次・加藤孝三・和田秀雄・小川正雄・今和次郎・広川松五郎・海野清・太田静一・木村清・藤芳太直・小菅敬左右・森田清次郎。

九月　『作品集第六』を画報社より発行。

一〇・七　委員会。互選により常務委員に高田松男・津田信夫・羽田禎之進・土橋三郎・岡本一平・海野清を選出。

一一・一四～一七　静岡県下江尻、清水、興津、原へ遠足運動会実施。

本年中、瀬戸近死去(四月)、鷹野暈死去(六月)につき弔詞と香奠各五円を贈呈。増尾精一死去(十月)につき弔詞と香奠二円を贈呈。笠井弥一死去(一二・一四)につき弔詞を呈す。

明治四十三年

二・一二　文学部主催講話会開催。巌谷小波・内藤鳴雪が講演(演題未詳)。

三・三〇　月報編輯員大谷浩・岡本一平卒業につき大野隆徳・川路誠(柳虹)へ後任嘱託。

五・七　文学部主催講話会開催。遠藤隆吉「事々真如」、生田長江「詩歌の将来」(ともに『東京美術学校校友会月報』第八巻第十号に筆記掲載)、小山内薫(演題未詳)の講演が行われる。

九・一七　文学部主催臨時講話会

校友会音学部主催 山田耕筰送別音楽会記念(明治43年2月20日)

開催。寺崎広業が「清国漫遊談」を講演。

九月　『作品集第七』を画報社より発行。

一〇・一一　委員改選。職員部委員は結城貞松・〇和田英作・黒岩倉吉・島田佳矣・石田英一・津田信夫・石井吉次郎・白浜徵・屋代鈥三・〇羽田禎之進・〇高田松男・磯野富之助。生徒部委員は岡村栄・今尾十一郎・伊藤順三・〇小森二郎・長井智寛・中村弥藤治・野木定次郎・酒井栄之・〇神津港人・山口亮一・加藤孝三・田辺孝次・和田秀雄・今和次郎・森田潔・藤村彦四郎・〇寺嶋恕・山本菊一・香川源四郎・藤芳太直・筑瀬由太郎・幕谷四郎。（〇印常務委員）

一一・七～一〇　中尊寺、松島、仙台へ修学旅行実施。

本年中、船田船岳死去（二・二八）、海野豊太郎死去（四・一八、号珉乗。勝珉の息）、磯矢隆之死去（七・一）、井上六郎死去（七月）、筧定次死去（於仏国）、朝倉静麻死去（九・一四）につき弔詞を呈す。森川瑛死去（五月）につき弔詞と香奠三円を、山田清死去（七月）につき弔詞と香奠五円を贈呈。

明治四十四年

一・二五　本校火災により校友会庶務に属する書類を悉く焼失。

一〇・七　文学部主催講話会開催。後藤宙外「自然と作家」、馬場孤蝶「青年の権威」、松居松葉「西洋芝居の話」（いずれも『東京美術学校校友会月報』第十巻第七号に筆記掲載）の講演が行われる。

一〇・一三　委員改選。職員部委員は〇桜岡三四郎・〇羽田禎之進・〇高田松男・結城貞松・和田英作・黒岩倉吉・島田佳矣・石田英一・石井吉次郎・白浜徵・屋代鈥三・磯野富之助。生徒部委員は〇田辺孝次・〇藤芳太直・内田他治郎・川路誠・立野甚一・太田義一・佐藤久米・酒井栄之・布目敏行・浅井政蔵・大久保作次郎・小糸源太郎・小室順吉・佐瀬芳之助・瀧川一則・板倉勝磨・専頭憲太郎・大森俊治・西村敏彦・酒巻洵・田中卓爾・杉浦魁・幕谷四郎。（〇印常務委員）

本年中、中島英二郎死去（三月）、藤川直造死去（一〇・三）、島庄吉死去（十二月）につき弔詞と香奠各三円を贈呈。青木繁死去（三・二五）、平子尚死去（五・一〇、号鐸嶺）、中溝四郎死去（七・一七）につき弔詞を呈す。内藤敬三郎死去（九月）につき弔詞と香奠五円を、小林辰知死去（十一・三）につき弔詞と香奠二円を贈呈。

明治四十五年、大正元年

一月　『作品集第八』を画報社より発行。

二・一五　剣道、柔道、弓術部員の寒稽古賞状を定め、皆勤者にこれを授与。

七・二九　『東京美術学校校友会月報』第十巻第十号は「第百号紀念号」として発行された。表紙及び口絵にはアクロポリス古式彫像写真が用いられ、左記の論説が掲載された。

正木　直彦「校友会雑誌第百号」

久米桂一郎「アクロポリスの古式彫像」

石島　古城「横浜より」

高村　光雲「高橋鳳雲の半面」（談話筆記）

芳川　流外「美の説」
石川　光明「暁斎と是真」（談話筆記）
香取　秀真「やまと琴」（短歌）
河辺　正夫「亜米利加の話」
竹内　久一「百づくし」
西村　青帰「思ひ出」
水谷　松処「後凋居詩鈔」（漢詩）
迂　僊　生「ぬきがき」
水島爾保布「旅より旅」（短歌）
平田　松堂「一言百題」
屋代　晁江「雪淵二律」（漢詩）
鶴　二「校友会月報百号紀念号を祝いはんへりて」（短歌）
南　　薫造「ウキンゾーにて」
山本　　豊「わかれ路」（短歌）
大野隆徳「ポスト・カーヅ・アルバムより」
屋代　晁江「校友会月報の回顧」
なにはさうび「京都より」（詩）
散歩派の一人「無題」
三　郎「浅草の夜と鼓の音」（短歌）
た、か生「私」
あいか「落人」（短歌）
じごま「独語」
竹本　吉二「六月の歌」（短歌）
あいか「小曲三篇」（詩）
屋代　晁江「夏十首」（短歌）

挿図には黒田清輝筆「菊」、寺崎広業筆「富嶽」、岡田三郎助筆「百日紅」、小堀鞆音筆「百済河成」、和田英作筆「薔薇」、福井江亭筆「鵜」、藤島武二筆「紫陽花」、岡田秋嶺筆「百合花」、長原止水筆漫画、結城素明筆「ちゝ草」、鶴田機水筆「山水」、中村勝治郎筆「猫」、千頭庸哉筆「筑波山中男女川」、松岡映丘筆「牛飼」、岡本一平筆「獅子」及び漫画三点等が掲載されたが、「菊」、「猫」以外は全て本号祝賀のために描かれたものであった。

一〇・二三　委員改選。職員部委員は前年に同じ。生徒部委員は秋本一郎・鴻巣善蔵・太田義一・寺門祐之・根岸庄助・吉田健夫・小糸源太郎・小松喜代子・長崎了恵・浅井政蔵・清水外三郎・河村弘・林健市・浅野廉・藤村喜四郎・安藤喜八郎・大森俊治・高村豊周・中村保太郎・石崎誠二・村上稠・田中卓爾・中村義守。

一一・七　従来月報編輯に尽力した田辺孝次に月報編輯員を嘱託。

十一月現在月報編輯員は久米桂一郎・岩村透・岡田秀・中村勝治郎・黒岩淡哉・小場恒吉・八巻於菟三・香取秀真・堀井政吉・波根義三・屋代鈕三・川路誠・田辺孝次。

十一月　『作品集第九』を画報社より発行。

本年中、大坪宗一死去（一月）、橋本武夫死去（三月）につき弔詞と香奠各四円を贈呈。引田八蔵死去（二月）、吉川秀一死去（五月）につき弔詞と香奠各二円を贈呈。土橋三郎死去（三・二六）、柴田健

次郎死去（五・二六）、斯波義辰死去（一〇・二三）につき弔詞を呈す。林美雲死去（七・二九）につき弔詞と香奠十五円を贈呈。

大正二年

三・二〇　『作品集』編纂（従来屋代鉞三に嘱託）は第十一巻以降を北浦大介に嘱託することとする。

四・一六　月報編輯員川路誠・田辺孝次卒業につき、後任を高村豊周に嘱託。

五・二　委員改選。職員部委員は結城貞松・和田英作・黒岩倉吉・島田佳矣・石田英一・桜岡三四郎・石井吉次郎・白浜徴・合田清・屋代鉞三・羽田禎之進・高田松男・磯野富之助、生徒部委員は佐々木義政・鴻巣善蔵・太田義一・富田賢太郎・三宮恒・吉田定夫・小糸源太郎・山田誠一郎・長崎了恵・浅井政蔵・山中儀太郎・渡辺信助・高須俊彦・林威三・水谷慶二・浅野廉・手島達雄・高村豊周・生駒弘・中村保太郎・神庭亮三・村上稠・田中卓爾。

七・一　水泳部設置。

一〇・二六～二九　修学旅行実施。

日本画科　長野県上林温泉、山田温泉へ

西洋画科　足尾より日光湯本[元]へ

彫刻科　日光、中禅寺へ

図案科　箱根より乙女峠を越え御殿場へ

金工科　妙義山より伊香保、榛名へ

鋳造科　箱根旧道より湯本へ

漆工科　銚子より利根川を溯り香取、鹿島両社へ

師範科　香取神社より利根川を下り銚子、木更津へ

十一月　『作品集第十』を東京美術学校化学室より発行。本年中、石川光明死去（七・三〇）、岡倉覚三死去（九・二）につき生花各一対贈呈。安部一二太郎死去（大正元年一二・一〇）、佐野左司馬死去（九・三）につき弔詞と香奠各二円贈呈。小川正雄死去（一二・六）につき弔詞を呈す。

大正三年

二・四　委員会開催。体育部の中に相撲部を新設の件、本校倶楽部修飾費として千五百円寄附の件等決議。

二・一四　文学部主催文芸講演会開催。これについては前日の『読売新聞』に予告記事が掲載されており、十四日午後一時から大講堂で開催すること、有島生馬「セザンヌの建設」、水谷鉄也「自由芸術」、与謝野寛「人生派の詩」、梅原良三郎「バルザックの『知られぬ傑作』」の講演（未公開）があると報じられている。水谷の講演録のみが『東京美術学校校友会月報』第十四巻第九号に掲載されている。

四・二四　委員改選。職員部委員は結城貞松・和田英作・白井保次郎・島田佳矣・海野美盛・桜岡三四郎・石井吉次郎・白浜徴・合田清・屋代鉞三・羽田禎之進・高田松男・北浦大介。生徒部委員は畑保之・星川清雄・佐々木義政・鴻巣善蔵・佐藤直己・井沢龍海・吉田健夫・徳田多助・宮地茂・福原全秀・清水

彦太郎・山中儀太郎・長塚広造・富田基一・林威三・木下唯親・塀和千代彦・高村豊周・三好政治・長谷川広・神田義富・神庭亮三・村上稠が当選。

本年中、久保田篤敬死去（五・九）につき弔詞を呈す。鶴田幾太郎死去（五・二八）につき弔詞と香奠十五円を贈呈。

大正四年（本年より月報に校友会庶務報告が掲載されなくなり、会務が把握できなくなる）。

三月　『作品集第十一』を東京美術学校化学室より発行。

一一・二〇　文学部主催講話会開催。小林万吾「スペインの話」、坂井犀水「何を求むるや」、中川忠順「ボストン博物館蒐蔵の日本画の価値」、三宅雪嶺「無題」の講演があり、これらの講演録が『東京美術学校校友会月報』第十四巻第九号に掲載された。

大正五年

一月　本月発行の月報第十五巻第七号より北浦大介が実質上の編集主任となる。

三月　『作品集第十二』『作品集第十三』を東京美術学校化学室より発行。

大正六年

三月　『作品集第十四』を東京美術学校化学室より発行。

六月　『作品集第十五』を同室より発行。

九・一五　大村西崖の慫慂により日本画科生徒を中心とする詩文会が文学部に設けられ、第一回目を開催。漢詩、漢文の勉強会を始めた。

大正七年

一〇・二六　詩文会主催講話会を講堂で開催。黒木欽堂「落款題賛に就て」、滑川澹如「支那文房具説」の講演があった。

大正八年

一月　屋代鈆三の後任として北浦大介が月報編輯主任となる。

六・二五　委員会開催。規則を改正し、今後卒業生は悉く特別会員（会費不要。希望者のみに月報を販売）とすること、写真部の廃止等を決定。

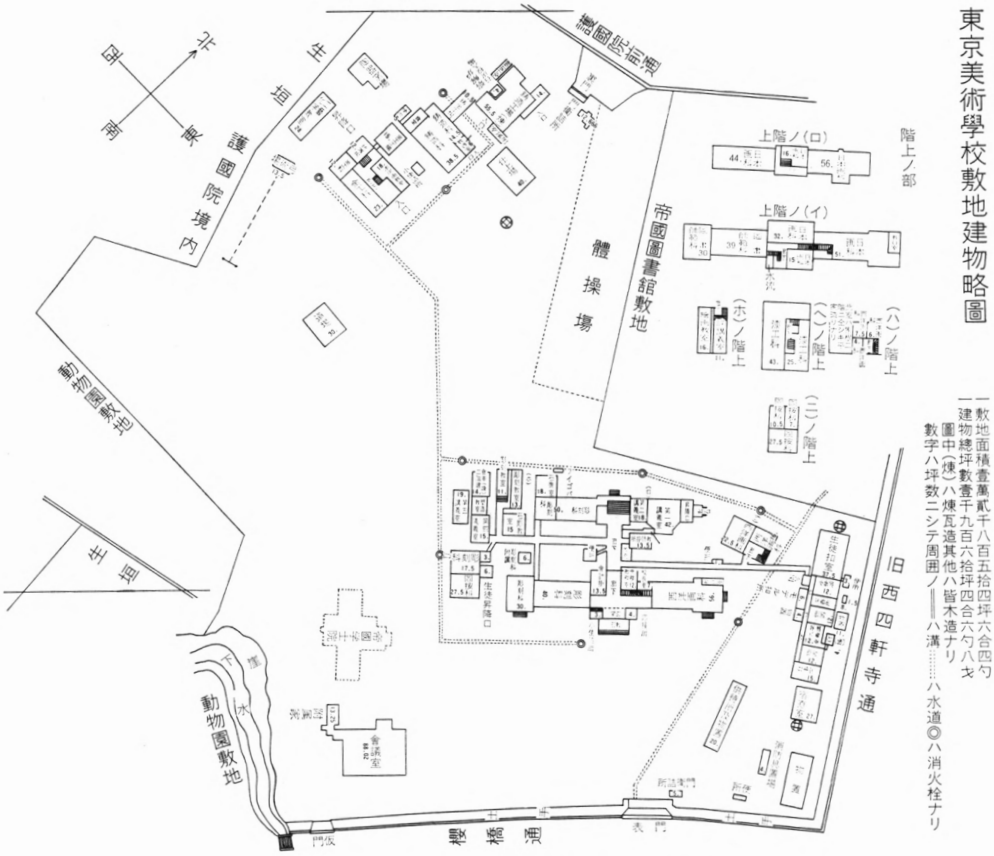
九月　月報主任の職が廃止され、今後鈴川信一常務委員が編輯を総括監督し、田辺孝次が編輯専務となり、次の分担で編集することとなった。

鈴川　信一（本校教務掛）卒業生および生徒動静、校友会各部状況

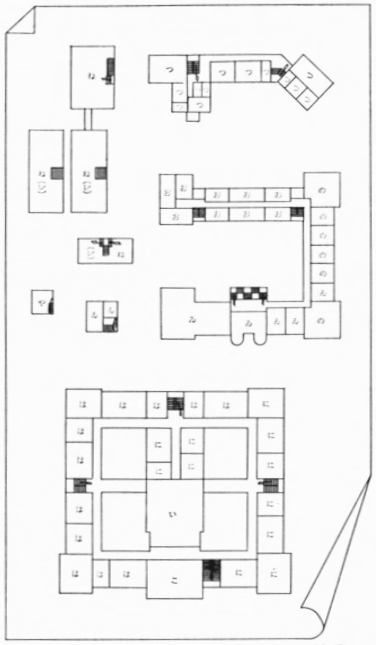
屋代　鈆三（同庶務掛）学校近事

足立芳五郎（同会計掛）会費および会計

北浦　大介（文庫掛）文庫および寄贈図書等



(『東京美術学校一覧 従明治四十年 至明治四十一年』より転載)



各室階上之部

各室符號	各室
い	講堂
ろ	校長室
は	日本畫科
に	西洋畫科
ほ	彫刻科
へ	應接室
と	食堂及附屬室
ち	事務室
り	電話室、小使室
ぬ	講義室及附屬室
る	繪畫教室
を	便所
わ	石膏室
か	弓道場
よ	劍術柔術道場
た	窯業
れ	鑄造工場
そ	門衛室
つ	化學室
ね	文庫及附屬室
な	造型教室
ら	鑄造科
む	金工科
う	生徒控所及附屬室
ゐ	圖按科
の	圖畫師範科
お	漆工教室
く	木工教室
や	物置及倉庫
ま	モデル控所
け	作事場
ふ	直室
こ	宿議室
え	會付室
て	受關
あ	雜物
さ	煉瓦造

(『東京美術学校一覧 従大正元年 至大正二年』より転載)